

「横浜軍陣病院」の再検討

中西 淳 朗

一、はじめに

横浜における医療史の原点のひとつに、一八六八（慶応四）年の戊辰戦争のさい、W・ウィリスによって閏四月十八日に開かれた、いわゆる横浜軍陣病院があげられる。

しかしながら、大久保利謙氏が昭和十九年に、この病院の発足について、『横浜沿革誌』とそれを種本とした『横浜市史稿』（以下『史稿』と略す）では洲干弁天の語学所内であり、一方、『横浜軍陣病院の日記』（以下『日記』と略す）や『復古記』では野毛修文館となっており、全く符号しない点を指摘された。以後半世紀をへたが、今日までこの問題を解いた研究を知らない。

そこで、『史稿』政治篇三巻の分析、J・B・シッドールの報告書、『日記』の再読等から、病院所在地の解明を試みた結果を報告し、併せて病院の実態について入院情況、東京移転、運営組織等について言及する。

二、横浜軍陣病院の所在地について

(イ) 『史稿』の研究

a、官修墓地の碑文をめぐって

『史稿』政治篇第三卷五九四頁の第五項・病院(二)横浜病院の条における記述配列が非常に奇妙で、病院の発足に関して墓地の話がなぜ真先に出るのか疑問をいだいた。

「洲干弁天語学所内を假病院と命名し(中略)、同病院で死亡した兵士の墳墓は現に久保山にあって、何れも其墓銘に「卒于横浜病院」と刻してある」という一文である。

そこで西区元久保町の久保山共葬墓地の官修墓地を調査した。第三区の土州藩の墓碑五基、第五区の長州藩の墓碑六基の計十一基が病院での死亡者で調査対象となった。

その結果、①碑文には返り点はなく白文である。②碑文と『日記』とを照合し、負傷月日、負傷場所、入院棟、死亡日、年令等をならべた一覧表を作ったところ、埋葬されている兵士はみな六月以降の死亡であることがわかった。③病院の主体と考えられていた修文館や、五月八日より使用された元勘定役所は、五月十九日以降新入院停止となっているので、この十一名中の十名が太田陣屋で死亡していることがわかった。

以上の如く、両藩の入院死者のほとんどが、太田陣屋に入院し死亡しており、洲干弁天の語学所とは何の関係もないことが、はじめて明らかになった。残念ながら『史稿』の横浜病院に関する記述は当をえていない。

b、上申書の研究から

『史稿』政治篇第三卷五九七頁から、病院御使番が五月四日に大総督府に提出した上申書を全文のせてある。この上申書を、大鳥蘭三郎氏は昭和十年の「近世日本病院略史(四)第三章第二節 横浜病院」に引用している。

しかし、大鳥氏は上申書の前半部分(修文館が満員で大変だ)にだけ眼が向いていたようで、後半部分に対するコメントはない。そこで上申書の後半の一部分を掲載する。

当御場所之儀至ツテ手狭故、此頃中、種々心配罷在リ、既ニ、旧幕兵学所手広之由ニ付、裁判所へ罷出、井関氏へ篤談判ニ及セ候処、右場所之儀、仏人へ幕府ヨリ遣シ之有リ、種々六ヶ敷ク差シ支候由、悉細寺島陶藏士モ承知致サレ候由、此節出府中之儀ニ付尚御問合セ下サルベク候。

ここに出てくる旧幕兵学所とは、三兵教育をした横浜フランス語伝習所のことであり、前出の如く洲干弁天語学所とも呼ばれた。即ち、仏国人が慶応四年三月一日から幕府より伝習所の借用許可をえているので病院には使えない、という返事があったというのである。この伝習所の返還は明治三年三月末日であった。(神奈川県史料第六卷三〇七頁・三年三月十五日の仏国公使書翰並に返答書)

以上の史料から、洲干弁天境内のフランス語伝習所を軍陣病院に利用する政治情勢は、全く存在しなかったことが判明した。

『史稿』並に『横浜沿革誌』の軍陣病院に関する記述は全くの誤りである。(誤った理由の一部は、第九二回日本医学史学会総会の一般口述三五番で報告した。)

(口) J・B・シッドールの報告から

J・B・シッドールの公式報告書(一八六九年三月三十日付)によると、修文館病院は外国人居留地から二マイルの地点にあったと書いている。

慶応二年正月に野毛山下の林光寺下に建てられた修文館(旧中税務署の地)から二マイルとすると、山手の外国軍駐屯地をこえて本牧山中となり、当時民家はない。

慶応三年正月九日から徳川昭武が修文館を本陣代りとして二泊しているので、史料未発見ながら、前年の十二月迄に野毛山下から修文館を山上に移転(現在の老松中学校の地)し、改修したと考えられる。この野毛山上の修文館から二マイルという、ヘボン邸の一劃に当る。即ちシッドールはヘボン邸の一劃を、山手を含めた居留地の中心と考えていた

と思われる。その理由は、シッドールが報告書をかいた翌年、ヘボン邸の一劃に入る六七番で開業した事実による。

(ハ)『日記』の再読から

第九二回の總會に、御使番詰所は修文館病院と離れた地点にあったと思わず記事が、『日記』前半に認める点を報告した。その後、詰所につき『日記』以外の史料から検討を加えた。しかし、分離説を展開する紙数がないので割愛する。

以上の如く、詰所(受附所?)の論議を除いても、軍陣病院の最初の所在地は野毛山上の修文館であったという結論に達した。

三、軍陣病院の実態について

(イ)入院情況

閏四月十八日の開院後、一ヶ月の間に修文館、元勘定役所、太田陣屋の三病院に患者を收容した。修文館は同二十二日には在院者があふれ、患者十名に対し非患者が二十三名もいる有様で、太田陣屋の伝習長屋(七棟十三大部屋一七〇床と推定)が使用できるまでこの混乱は続いた。五月末から全治退院者が出始めたものの、グラフを作ってみると、入院患者数は九月二十四日(会津若松城開城後三日目)まで上昇線を描いている。

(ロ)東京移転

東京大病院が七月二十三日に開かれ、直ちに移転が始まった様に伝えられているが、『日記』を読む限りでは、九月一日に近々移転と職員に伝えられている。九月二十三日の入院患者の中に若松城攻撃で負傷した兵士がおり、近日開城の情報が流れたと考えられる。

その三日後、シッドールらの慰労宴会を開き、十月一日より東京大病院の会計係と移転事務接渉が行われた。同月三日より東京への計画的差送り作業がはじまり、正式な布告は遅れて十月十一日である。同月二十一日の閉院までの差送

り患者は計一九三名であった。

(ハ) 運営組織

a、医局 太田陣屋の教師館の中二階に五月二十二日より医局を開き、毎朝九時に医員が集合し、治療打合せを行った。

b、医師団 五月二十六日より頭取制がひかれ、頭取(初代・薩州・有馬意達)、次席医、御雇医、御雇手伝、各藩医、見習医の順で、五十四名前後の医師がいた。

c、事務局 中央の大総督府や、神奈川裁判所等と連絡をとる御使番と、経理面の管理をする会計方がいた。御使番は五月十八日に教師館へ引越して来た。目付役として陣屋詰軍監が大総督府から出張して来ている。

通達等は廻状の外、口頭、掲示をもつて三病院毎に行われた。

四、まとめ

「横浜軍陣病院」は、まず野毛山上の修文館での設営からはじまった。洲干弁天の語学所とは無関係である。なお、今日まで明らかでなかった病院の実態について略記した。

(横浜市・中西医院)